

## ペ ス ト

人物

男 30歳から50歳の男性

女 30歳から50歳の女性

海辺のカフェ。色とりどりのビーチパラソルのテーブルと椅子。縞模様のひさしテント。旗。強い日差し。ときおり、カモメの鳴き声や遠くでオーケストラが奏でるポピュラー音楽が聞こえる。

(男 登場、小さな旅行用のバッグと新聞を持っている。テーブルに座り、バッグから魔法瓶とカップを取り出し、テーブルに置く。新聞をパラパラとめくり、読む。読んでいると女が登場、同じテーブルに座る。チラシを手にしている。ふたりとも夏姿。サングラスをかけていてもいい。)

男 暑すぎはしないか？ 今日は35度まで上がるって言っていた。

女 そんな天気はまっぴらだわ。いっそのことマイナス35度までになって、あのゴキブリやノミの奴らを殺してくれないかしら？ 今日のような天気のせいで、まさしくああいう連中が増えるのよ。

男 あいつらは君を立ち止まらせなかったかい？

女 いいえ。駅の回りに警戒線を張ってたけど、身分証明書を見せたら通してくれたわ。

男 どうみても、あいつらは北方から来る満員電車を待っているな。

女 そう、多分。でも、どうしてみんなここへ避難してくるのかしら。内陸よりも海辺のほうが健康にいいというわけでもないのに。船からネズミが出てくるし、その反対だわ。

男 みんながパニックになって逃げようとしているというだけのことさ。それに、海岸というのは、いつでも内陸より魅力的で、健康にもいいように見えるのさ。混乱が広がるんじゃないかな。人々はあちらこちらにさまよい歩いては、感染を広げている。早く解毒薬を発見しないと何が起きるかわからない…。恐らく、路上で人間を野良犬みたいに銃殺し始めるだろう…。ついには衛生兵がやって来て、注意を引く者ならだれでもしょっぴいていくことになる…。(コーヒーを注ぐ)…。こうしてわれわれは陽の当たるところでコーヒーを飲みながら、遠くで奏でるオーケストラを聴いて座っている。その間もペストはわれわれの周りで猛威を振るっている。どうして、心ではペストのことがわかっていながら、体はコーヒーを楽しむことができるのか説明してほしいものだ。

女 私にはわからない。わかっていることは、水は沸騰させたものでなくちゃいけないということ…。ほかに手があるの？ 事態を変える力がないのだから、できるだけ正常に生活を続けて行くよりほかに、何か方法がある？

男　　そうだね…。君も私もそういう考えだが、大半の人々はそんなふうには思っていない。倒れる人はどんどん増えている。隣人が病気の兆候を隠したとって告発する。子どもが両親を当局に通報する！　だれもがぴりぴりしている。事態はどんどん進んでいて、他人の注意を引く人はだれも嫌疑を招くことになる。あげくには、赤い髪をしているとか青い服を着ているというだけで、その人をよってたかってリンチすることになるのさ。

女　　そう、あなたの言うとおりでわ…。このところ儀式や祭事や式典が多いわ…。毎日何かしら新しいことが起きているのよ。現在の状況からすれば理解はできるけれども、でもそんなことをして一体何の役に立つの？　空に不思議な兆候を見たからといって、それが何になるの。たった一つの必要なことは解毒薬の発見だというのに。

男　　朝刊を読んだかい？　北方でやっていることを？　鞭打ち苦行者のことさ。あいつらは、ただ街角に立って釘や鞭で自分を傷めるだけでは満足しない。あいつらは自分たちが、みずからの罪を償うようなありきたりの存在ではなくて、聖人の軍隊であると言いふらしている…。その聖人は次の千年のあいだ、国の統治を受け継いで行くのだろうというのだ。あいつらは超自然の能力があると主張している。人間から悪魔を追い払い、病を癒し、死人を甦らせることができるというのだ。自分自身がすでに死から甦ったのだと言いふらす者さえいる！…それだけではなく、群衆を引き連れてあちこちをさまよっているのだから、かえって感染を広めているのだ。だから、その信奉者の歩いて来た道をたどろうと自衛兵は躍起になっている。

女　　ねえ…、これご覧になって。（チラシを見せる。）

男　　（大きな声で読む）「“神の聖人の復讐者”が今ここ、われらの中にいる。“復讐者”は討伐者としてわれらのあいだに現れている。“神の怒り”は罪人すべてにひとしく及ぶであろう。汝らに神が備えた“復讐者”に会う準備をせよ。その者は、汝らがこの言葉を読んでいるあいだに、汝らのそばにいる男でも女でもありうる。」…。全く気が触れている、こいつらは…。勢力があまり大きくなりすぎないでほしいものだ。

（遠くのオーケストラの音楽が小さく聞こえている。）

女　　図書館で働いていた同僚の一人が仕事を辞めたわ。私たちが救おうと二十四時間態勢の連鎖祈禱を立ち上げるのに協力するためですって…。ええ、薬がないとか、いかなる薬を発見する望みさえもないような致命的な病気に直面した場合、どんな立ち振る舞いをしたところで、それは多かれ少なかれ当然のことだわ…。今の状況では、すべては生き方に還元されるのじゃないかしら。人生の不公平を訴えて叫びながら、井戸の縁に引かれていき、そうして頭から井戸に投げ込まれるのか…。それとも、自分から井戸の縁まで歩き、音もなく、不平も言わず幾分でも威厳を保って闇の中を、はしごを伝って降りていくのか。どちらを選ぶこともできる。結果はどちらも同じことだけれど…、違いはその生き方にあるわ。

男　　そのとおりだ。われわれをウサギやウマから区別するのは、生き方こそが重要だとわれわれが考えているということだ。…（間。コーヒーを飲む。）…　君の大好きなハチミツ入りのケーキを買おうとしたのだが、売り切れだった。来るのが遅すぎたんだ。

(間。遠くの拡声器から熱烈な演説が聞こえてくる。言葉は聞き取れない。)

男 聴いてごらん。最後の審判のことを知らせる者がまた現れた…。生きることに耐えられなくなった人間が、まだ自分たちが生きていることを忘れられなくて腹を立てているのだ。

(間)

男 私たちが出会ったときのあの日を覚えているかい？ あの島でのことだったね。すばらしい日だった！私たちは同じテーブルに座っていて、それには青と白のクロスが敷いてあった。そのときはハチミツ入りケーキを入手できた…。よく覚えているよ、太陽の光が海に反射して、目がくらむばかりだった。

女 ええ…、ほんの半年前のことよ。お互いの家族についての知らせを受け入れようと努力して…。あのとき、もう子どもたちに会えないのなら、これ以上生き抜けるとは思えなかった。

男 ああ。子どもたちのところへ行くことはできなくても、外国で安全に生き延びていることは、今では少なくともわかっているね。今の状況を考えると、彼らが遠くにいる方がいいと思わないかい？

女 そうよ、あなたの言うとおりのよ。でもペストは一カ所にとどまるものじゃないわ。いつか子どもたちのところにまでやってくるでしょう。そのことを考えないわけにはいかないわ…。ある意味では、あなたの方が気楽ね、もう全員を失ってしまったのだから。

(間。遠くの声と音楽はまだ聞こえている。)

女 ペストがそこまで来たとき、どうすべきか議論したことを覚えている？ あのとき、たった一つの防御策は逃げることだとみんなが考えたものよ。

男 そうだった。留まって立ち向かうべきか？ 抵抗してペストに屈するか？ 消滅することに抵抗するか？ 人間的なすべてのもの、認識…、愛惜…、驚く能力、そうしたもののすべての破壊に抵抗するか？ うん、覚えているよ。

女 私たちはとうに予測していた。人間的なものすべてが心を持たない細菌に滅ぼされ…、私たちの家族にまつわること、私たちの人生で大切なすべてのこと…、科学だとか…、文学だとか…、音楽だとか…、そうしたことのすべてが跡形もなくなるだろうということを。万物は混沌のなかに消えて行き、ペスト菌を運ぶ家ネズミのように生きている通り魔によって滅ぼされるでしょう。かつて人が花に水をやり、子どもの誕生を祝ったりした家のなかで…。以前予測していたそうしたことが、今では現実になりつつあるのだわ。

(間)

男 (舞台の外を通る通行人にあいさつ。)

こんにちは！ ... はい！ ... 今日は暑いですね...。はい...。そうやってほしいものですね！ ...では！

(間、人物が通過するのを待つ。)

男           あの女だ。毎日あのバスケットを持って墓地へ上って行く。

女           毎日墓地へ行っては、午後いっぱい、ご主人のお墓で座っている人ね？

男           そう、彼女さ。あのバスケットにはお湯とティーポットとティーセットが入っている。墓のかたわらとか、時には上とかに座ってお茶を飲むのさ。毎日午後、三時間でも四時間でも座っているのさ。

女           何をするわけ？

男           死んだ人と話しあっているのさ。ご主人を亡くしてからずっと毎日そうしている...。もう一年以上になる...。もちろん当時はまだ棺は入手できたんだ。昨今はもう棺の製造も間に合わない。

女           死んだ人とそんなに時間をかけて何を話しているのかしら？

男           「慰めようのない苦渋」と言うのさ。あるいは「消しようのない憤怒」とでも言おうか。夫の墓に向かって、この四十年間積み重ねて来た怨恨と侮蔑をぶちまけているのさ。夫が彼女を自分の言いなりにしようとしてきたと思って怨んでいるのだし、自分がその言いなりにしてきたというので自分を蔑んでいるんだ...

いずれにせよ、彼女は今、人生の勘定を清算しているところなんだ。通帳を取り出して、机の上に広げてひとつひとつ細かく調べないといけない。そんなことで、やるべきことがたくさん残っている。残された人生のあいだ、毎日の午後にそれを割かねばならないほどたくさんね。

女           そういう状況だってことを、あなたは どうやって知っているの？

男           ふたりの間がうまくいっていたら、これほど課題が残されることはなかったろう。良質な間柄だったら、死後もお互いが平安のうちにいることができただろう。しかし、このふたりには言葉にならない生活があったので、それがふたりの上にエネルギーのように漂っていて、何とかしてそれから解放されねばならないんだ。とまれ、そのことは彼女にとって日々を送る手助けにはなっている。我々はだれでも日々を送るには手助けが要るんだよ、こうしてコーヒーを飲んで座っているようにね。ペストが流行する前は、コーヒーを飲むことは快樂であって、それ以上の何ものでもなかった。しかし、こうして今は、「いつものように」コーヒーが飲めている。今重要なのは、この「いつものように」ということなんだ。ペストに立ち向かうことではないんだ。避けられないことにどうやって立ち向えるんだ？ 簡単にいえば「いつものように」だけが今もわれわれに残されているということだ。

(遠くのオーケストラの音。)

女　　そうね...、それしか残っていないわね。すべてが瓦解しているとき、たった一つの防御手段は習慣しかないわ。図書館での仕事は続けて行くつもりよ...。本を整理したり、索引を改訂したり、図書を新規に購入したりして。たとえ、本がペスト菌に汚染されているというので、もうだれも本を借りに来なくてもね。あなたはあなたで翻訳の仕事をするんだわ、印刷されることがなくても、だれも読む人がいなくても。そんなことは意味のないこと、馬鹿げたことだと決めつけてもいいわ。でも、まさにそういうことこそが、こうした状態にある私たちのような人間にはふさわしい仕事なのよ。

(遠くの演説が止まる。)

男　　ペストはわれわれを逃亡者に変えようともくろんでいる。ペストがわれわれの近くまでやってきたかどうか確かめるために、たえず肩越しに後ろを振り返りながら、あっちからこっちへと駆けてゆく逃亡者だ。君や私はそれよりも少しはましだということさ。ただ単に静かに話しながらテーブルについているだけだが。

(間)

女　　昨日も図書館で話していたわ、どんな香をどうやって焚くとペストに一番効くのか、ジャスミン、香、ローズマリー、ネズの木などと。

男　　そんなものではペストを威圧できやしない！でもね、ネズの匂いには納得がいく、強烈だからね。たったの一かけらでも部屋中に匂うからね。

女　　ネズの木はいつ見てもやせていて雑巾みたいよね？抱きつこうものなら尖った葉っぱで押しのけるのよ。だから広い空間を好むのね。

男　　そう、ネズの木には空間が必要だ。森へ出ていくと、石ころや浅くてやせた土地しかないところがある。でも、そこにはネズの木が岩のあいだから生えている。

(遠くの爆発音。男、腕時計を見る。)

男　　すごい！時間どおりだ！いまだに毎正時に大砲を打てるということだ...。火薬が空気を浄化すると信じる人もいるからね。

女　　そんなことで驚くことはないわ。人は効果がないとわかっているけど、とるに足りない支えにすがりつくものよ。

男　　そうだよな...、市当局もパニックを避けるために、なんでも気を使って、混乱を避けようとして最も陳腐なことでもやるものだ。

(舞台の外を通る二人目の通行人に話しかける。)

こんにちは！...奥さんはどうしてます？...お元気...、ええ、ありがとう。ほんと、今日は暑いですね...、私には暑くてやりきれませんよ...。ありがとう、あんたも...。何とかなるさ！...じゃあ、また。

女 郵便局へ行く途中かしら？

男 そう。彼は今もまだ通っている。毎日郵便局へ行くのは、自分の発明の特許申請に対する知らせが来たかどうかを調べるためだ。考えてもごらん！ ... 今どき、どこの役所の部局も危機対応に手一杯だ。だれも彼のことや彼のライフワークの集大成などには関心を寄せてくれないのだが、その事実を彼は受け入れられないのだ。今になってもそれをあきらめることができない。その発明品のことでは肩から荷をおろすことができない。いつまでも、人生の最後までそれを背負って行かなければならないのだ。

女 当然じゃない？

男 もちろん。

女 めいめいの個人史は、荷のおろし方がわかっていないと、最後に近づくほど背中にのしかかってくるものね...。このペストの時代を前にして自分の人生を振り返るとき、荷の重さを思い出す。人生のすべてのことには、それぞれの重みがあった。人生のすべてのことは、それぞれの影を投げかけている...。しかし、今、このペストの時代にあって、すべてのことが信じられないほどはっきりとした輪郭を浮かび上がらせているけど、すべてのことが影を失ってしまった。いかなるものの意味も問題にされない。あるもの前に、あるいは、後ろにあるものについても問われない。すべてのことが自明のことになる。この自明のことの背後には、忘却以外に何もなし。ペストが約束するものは何もない。何も与えない。ペストは2次元的であり、ひとは選ぶことができる。表面を見ること、それだけに人生をささげることでもできる。あるいは、事物の根源にまで到達して、大自然の秘密を発見するために...、顕微鏡によって生命を探求することもできる。どっちみち結果は同じになるでしょう。無知であれ知識であれ、結果は同じところに行き着く。私は、今までの人生では、そのことを理解できなかった。でも今は、それを理解することによって、以前感じていた以上に、今はとても自分を軽く感じるわ...。夏のそよ風に舞う蝶のように、とても軽くなり、荷がおりた。

男 ペストは私に空間を作ってくれる。私はここから一キロメートル向こうの教会のそばで生まれた。二十歳になったとき、幸運を求めて世間に出た。ここに帰って来たのは、半年足らず前で、それは家族を亡くしてからだ。私は、帰るとすぐ、丘に沿って歩いて、エニシダの黄色い花を眺めたり、ヒバリの歌を聴いたりした。ある日、丘を上り、風車小屋を過ぎ、田舎道を散歩した。その脇には、私よりも丈が高い壁が立っていた。その壁はたしかに何世紀もそこに立っている。壁は、この地方の多くの壁と同様、川べりの柳の木からできている。子どものころ、この壁の前に立ち、目で石の間の不規則な線を追っていたものさ。ここをあとにしてからも、私はよくこの壁のことを思い出したものだ。そう、さっきも言ったように丘を上ったんだ...。壁の前に、二メートルほど離れて立っていた、子どものころにそうしていたのと同じように。そうしたら、他に何か起きたわけでもないのに、突然、壁が崩れ落ちたんだ。そこには私のほかにはだれもいなかった。壁がただ崩れただけだ...。ぞっとするようなことだった...。しかし、そのとき、私の人生で初めて、その壁の背後にあるものが見えたんだ。

(間)

女           そう…。物事が見えるようになるには、視線からほかの何かを取り除く必要があるのよ…。大海を干す必要があるとも言えるわね。私はまさにそれをこの半年間やってきたわ…。大海いっぱい干したのよ。波の音が静まったとき、私の人生で初めて、聴くということができたわ。

男           耳を傾けて何が聞こえてきた？

女           聞こえてきたものは、恐るべき大きな叫び声だったわ…。“わが人生”と名付けた叫び。私が言うところの“わが人生”とは、ほんとうにだれも、私さえ今まで聞いたことのない、途切れることのない叫びだった。でも、今は聞こえる。その叫びは子どもの声であり…。その子どもは私であることを運命づけられていながら、生まれることが許されていなかったの。そして今、その叫びは激しくあふれ出てくるの。私は、その叫びをこの宇宙全体を満たすために解き放ったの。ペストがそれを解き放ったのだわ。その子どもの怒りと恐怖は宇宙の果ての星へ向かう途上にある。ペストが明日私を殺そうとも、それを止めることができるものは何もない…。この叫びは死の反対物なの。その子どもとなるべく運命づけられていた人が、とうとう生まれたのよ。彼女を生んだのはペストなのよ。

(遠くのオーケストラの音。)

(間)

男           見てごらん…。あのタカを…。風は気ままに吹くのに、あの鳥はいつも地上から見て同じところにいる。どうやったらできるのだろう？

(間)

ペストは外からわれわれにやって来るのではない。われわれの回りで見える死や病は、乾いた枝を燃やし尽くす火にすぎない。ほんとうのペストは、われわれ自身の中にある何ものかなのだ。それに立ち向かうたった一つの方法は、そのことを認め、理解することだ。それには空間が必要だ。ありふれた人生には空間は僅かしかない。過去と未来は万力のように両側からわれわれを締めつける。われわれはやっとのことで手足を動かすことができるにすぎない。それは苦痛ではあるが、かといってほかに取り得る途はない…。ただ、人生には時折、ペストが今まさにそうしているように、何ものかが基礎を破壊し、万力がゆるむことがある。過去も未来も消え去り、突然、現在だけが残される。もはや多くの時間は残されていないが、空間はある。 追求し、探索できる果てしない空間が。求めれば与えられる。空間は過去にも将来にも関わりがないのだから、そこには死は存在しないのだ…。

女           探して何かがわかったの？

男           そう、私にはわかったんだ。存在するすべてのもの、なされているすべての行動、すべてのできごとは、二つとないことなのだ。テーブルの上に落ちた君の腕の影、歩道の上の石ころの形、ある特定の瞬間の海の波に反射する陽の光、そうしたものはすべて、この宇宙の歴史上1回のできごとであり、たった1回だけのことだ。君も私も、この永遠の中で、それらを知る唯一

の存在なんだ。私の人生は、私にそのことを理解させるがゆえに、驚くべき成功であり、完全なものなんだ。

(船の汽笛がなる)

男　　また船が一隻到着した。波止場は大混乱になるだろうよ。人々がアリののように群がる。私たちは家に帰ったほうがいい。恐らく衛生当局が移住者を捜しに巡回を始めるだろう。衛生当局はますます神経質になっている。船が来るときは家にいた方が安全だ。

(男は魔法瓶と茶碗を包み始める。)

男　　さてと...、明日、同じ時間にいつものように会えるだろう。

女　　いいえ...、明日には来ないわ。もう会えないでしょう。皮膚に小さなしみができたのよ。

(彼女のことが意味することに気がつくまで、しばし、間。)

男　　ああ、そうか、わかった。

女　　わかる、残念ね、でもそうなの。

男　　ということは、私にも、もうあまり時間は残っていないんだ。

女　　そう、多分。

(間)

女　　もう話はよしましょう。おたがいのことはよくわかったわ。もうこれ以上、生きのびようとすることはないわ。

男　　そのとおり。生きのびようとしなくていい。浜辺に沿ってさっきの道をもう一度歩き、海を眺めよう。潮がちょうど満ちてくるころだと思う。

女　　ええ...、そうしましょう。海を見に行きましょう。

(ふたりいっしょに退場。)

終わり

エスペラントによる書き下ろし：ハロルド・ブラウン